

同性愛者がカミングアウトできない理由

卒業論文について

「同性愛」という言葉が社会に広く知られるようになった現在、男性同性愛者にインタビュー調査した研究はあるが、女性の場合はそれに比べて少ない。私は、女性同性愛者5人にインタビュー調査を行った。

その結果、女性同性愛者は「同性愛者」と認識するプロセスが、男性同性愛者における既存の研究で見いだされたものとは少し違う傾向があることがわかった。男性同性愛者の場合、既存の研究によると、まず自分以外の友人たちは女の子に性的な関心を向けるようになるが、自分だけはその対象が男であることに違和感を覚え、次第に具体的に好きな相手が現れる。そして性の対象が男性であることに気づく。しかし、この段階ではあくまでも「男が好き」であって「同性愛者」とは認識していないという。そして、主に雑誌などのマスメディアからの情報を得て、最後に自分は「同性愛者である」と認識するという。つまり、男性同性愛者はまず「あくまで男性が好き」であり、そこからある程度の時間を経て「同性愛者」とであると自覚するのだ。

ならば、女性の場合の自覚化のプロセスはどうなのであろうか。「自分は女性が好き」であるから「同性愛者」と認識するのであろうか。それとも「自分は男性が好きではない」であるから「同性愛者」とであると認識するのであろうか。調査の結果、女性同性愛者の協力者5人のうち、4人は「女性を好きと気づいた時期」が最初であり、そこから「同性愛と認識した」という段階を踏んでいることが分かった。しかし、この4人は、過去に男性との交際経験もあるので、「男性を好きではない」から「同性愛と認識した」わけでは無いようだ。

一方、もう1人はかなり特殊なケースで、年齢的にも昔のことを忘れている可能性があることを踏まえ、女性を好きになることは彼女にとって物心ついた時から当たり前のことであり、「女性が好きと認識した時期」がかなり曖昧であった。しかし、幼少のころから「女性が好きな自分は周りとは違う」という認識を持っており、男性には全く惹かれなかったと話した。つまり、「男性を好きではない」から「同性愛者と認識した」にも結びついてくるのではないかと言える。

つまり、彼女たちは「女性が好き」であるから「同性愛者」と認識するのであって、「男性が好きではない(嫌い)」から「同性愛者」という認識に繋がるわけではないのであ

る。

また、同性愛者と認識したのち、周りにその事実を知らせるかどうかという問題が発生してしまう。これを「カミングアウト」というが、カミングアウトをすることも彼女たちにとってハードルになっている。

カミングアウトするかどうかは、本人の考え方や性格によって大きく左右されていた。楽天的な性格であるほど、多くの人にカミングアウトしていたのである。反対に、消極的な性格ほどカミングアウトはしていない。

また、「同性愛」という事象は、社会から自分には全く関係の無い「他人事」・「異世界の出来事」として捕えられており、全ての人が「同性愛」に理解を示すわけではないと彼女たちは認識している。しかし彼女たちは同性愛の容認を社会に求めるような、何かしらの運動や活動を起こそうとは考えていない。彼女たちは否定の意思を見せられることを最も恐れているのだ。カミングアウトをしたところで、相手から否定されてしまえば、恐怖心が現れてしまい、次のカミングアウトに繋がられない。これがカミングアウトできない理由なのだ。

これを回避すべく、同性愛という事実を受け入れてくれる相手かどうかを吟味する必要があるため、探りを入れやすい親密な関係の人間を中心にカミングアウトしていく。しかし、最も親密な関係にあると言える「家族」には話していないケースが多い。「家族が動揺してしまう」可能性が高いと彼女たちは思っているからだ。最も親密であるからこそ、否定や拒否されてしまうのが怖いのだ。しかし、彼女たちは家族にいつまでも隠すつもりは無い。結婚や、就職などの、人生の岐路に立たされた時にカミングアウトしたいという意思を見せた。

卒業論文を書き終えて

インタビュー以前、同性愛者というのは私にとって未知の世界の人だと思っていました。しかし、それは大きな勘違いであり、まったくもって「普通に」生活をしています。決して世間と対立すること無く、しかしながら自分の価値観を大切にしている人たちだと思いました。この論文を書くにあたって後押ししてくださった、故川上宏先生とご遺族様に改めてお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。